

雨乞の灯火風流 幕末兵庫津の事例

福原敏男

A Refined Lantern Procession to Pray for Rain

はじめに

①雨乞の火祭り

②近世都市兵庫津

③【嘉永五子年六月 福原雨乞記】
おわりに

【語文解説】

嘉永五年（一八五二）六月三日夜より三夜連続して、兵庫津の二七の町々（現在の神戸市兵庫区の二六町と中央区の相生町に相当する）が雨乞を目的として、西国街道を舞台に一大灯火行列を繰り広げた。本稿では、その光と色彩と音のページェントともいべき造り物風流を取り上げて、その風流史的意義について考察する。

雨乞などというと連想されるのは修驗者の祈禱など、すぐれて宗教的な行為である。しかし、本稿で取り上げる雨乞は、危機儀礼というにはあまりに華美であり、新出の『嘉永五子年六月 福原雨乞記』（神戸市立博物館蔵）の挿絵を見ると、あたかもテーマパークにおけるイベント・パレードを見るような、心うきうきする楽しさがある。それはまた、観客の視線を意識した祭礼行列のようである。

同書巻末によると、惣入数一万三百人あまり、ほかに北浜と南浜の町より加勢人足約五〇〇〇人、松明一二〇〇、半鐘四〇七、太鼓三四〇、大鉦鍾三〇、法

螺貝六三、弓張提灯七一二〇が参加したと記される。一般的に、村落の雨乞いの方法として、村中の人々が鉦・太鼓・法螺貝などを鳴らしながら、松明を持って行列を作つて氏神などを出発して村を一周し、近くの靈山に登り、河原に降りてきて松明を積んで燃やす千本松明行事が知られる。兵庫津の事例はその都市版と想定できるが、兵庫津の内でも、農民が集住する「地方十八町」のうち一六町が参加しており、日照りは農業にとって深刻であったことをうかがわせる。稻の生育期の旧暦六月初旬における降雨の多寡は、稲作にとって死活問題だからである。

毎年繰り返される年中行事と異なり、雨乞のよくな回性の臨時の行事においては、殊に、各町の創意工夫が發揮され、まさに風流の精神が溢れ出る行事ともいえよう。